祭礼の参加者が運営者へと変化した時
—兵庫県西宮神社十日戎開門神事における取り組み—

荒川裕紀*

When the participants of festival changed to the management staffs
- Efforts of the Tōka-Ebisu “Opening Gate” Ceremony at Nishinomiya Shrine -

Hironori Arakawa.

ABSTRACT

Every year on January 10th, the main gate (commonly called as the “Great Red Gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 AM for visitors to proceed to the main shrine. This event is known as the Tōka-Ebisu as the “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *Fuku-Otoko* (Lucky Man). In this report, I would like to describe about recent movements among Nishinomiya Shinto shrine Area. There are lots of historical and cultural milestones recently. In 2008, Nishinomiya shrine asked some festival’s participants to organize the “Official Association for Opening of the Gate Ceremony”. From then, some participants and I became the “official member of the festival”. I would like to describe the reasons why we became official members, also some conflicts with the local people. This report should not be only the local document but practice case for public anthropology in the future.

KEY WORDS: EBISU, Fuku-Otoko, Shinto, Nishinomiya, Public Anthropology, Public Folklore

１．はじめに

「十日戎開門神事福男選び」とは、毎年１月 10 日に兵庫県西宮神社で開催される神事である。西宮神社の正門である表大門が午前 6 時に開かれると、前日より待ち構えていた参加者たちが一斉に飛び出し、230mの参道を駆け抜け、本殿を目指す。神社は先着 3 名を選び、「福男」として認定する。公式には鎌倉時代を起源とする神事とされてきた [1]。

当報告者は、1998 年より当神事の調査に関わり、歴史学、人類学、そして社会学的な調査を行ってきた。歴史学的調査では本神事の核をなす開門競争的な部分に関して、大正期から昭和期になって発展していったことを新聞資料と社務日誌から見出し、そこには改暦と阪神電気鉄道の開通が大きく作用し、新たなイベントを生み出した [2]と結論付けた。さらに太平洋戦争、高度経済成長と経る中で、参加者の増減はあるものの、この行事は維持され続けた。行事が生まれて以来、報道のされ方は一貫して「開門競争」であったが、昭和から平成への過渡期の中で、現在の開門「神事」福男「選び」という語を神社側が使い始めた。結果としては、各マスメディアの報道もあり、阪神大震災を経る中で、この用語は社会の中で定着していった。

現在では、関西圏の一大行事として日本全国的に取

*一般科目

り上げられるのみならず、香港・台湾・中華人民共和国といった中華圏でも報道されている。

報道の影響もあり、現在では早朝に開かれる神事であるにも関わらず、5000名を超える参加者が、西宮神社の本殿を目指している。

当報告者は歴史的変遷を文献調査で追及するのと同時に、面接法や質問紙法といった社会学的・人類学的な手法を用いて、現代における参加者の動機や、複数回参加者に対して、この神事に思い入れる理由について迫ってきた。さらに参与観察法として、1998年から8回、自身が走り参りを経験することによって、この神事の醍醐味について身体的に理解しようと進めてきた。この歴史学的な研究のみならず、社会学的・人類学的、更には民俗学的アプローチを含めた論考は2015年に博士論文[3]としてまとめた。

当論文においては、博士論文では言及の少なかった、2008年以降の開門神事の動向について報告を行いたい。2008年はこの開門神事にとっては、歴史的な転換点となる年であった。

前年度に報告した論文（北九州高専研究報告第50号pp.77-84）の中では、2004年から2008年までの動向について詳しく著した。具体的には2004年の開門神事の際に、大阪市の消防士の一団が一週間以上泊まり込み、先着順であった開門時のスタート位置を独占し、開門時に他の参加者を妨害したとみなされたとメディアで報道され、物議を醸しだした。この「事件」後、西宮神社と参加者たち、参与調査者であった当報告者までもが一堂に会して協議し、開門神事始まって以来初めて、参加者自身が開門神事に携わること、具体的には開門までの出走順をくじ引きによって決めること、さらには氏子青年会と協働して神事を遂行することなどが定められたのである。

そして、本論考で言及する2008年以降、この「元参加者たち」が、西宮神社の正式な組織、「開門神事講社」として機能することが求められた。その成り立ちの背景と、そこで地域の住民とでどのような話し合いがもたれたか、またはどのような葛藤や衝突があったのかについて論述する。

正式な組織（講社）になるということは、神社側や地域の自治会、氏子青年会との更なる接触が増えることを意味していた。正式に講社が設立した2008年12月以降、西宮神社の例大祭である「西宮まつり」に講社として参加を始めたことも大きい。当報告者にとっては、参与観察を止めて神事の遂行に関わり出した2004年が分岐点だったといえるが、この2008年は、「通常の研究者」としての活動以外の部分の比重が更に増えたことを意味した。

この年は、当報告者の研究の範疇である文化人類学・民俗学の分野にとっても大きな潮流が起ころうとしていた時期であった。なぜなら、「公共人類学・民俗学」がそれまでよりも注目を集め始めた時期だったからである。前述の活動は、その「公共に資する民俗学または人類学の実践」と言えまいか。

この数年、当フィールド（西宮神社を取り巻く諸祭礼）で当報告者が推進している実践から、公共に資する民俗学・人類学を推し進めていくためにはどのような方法論が有効なのかについて、具体的な事例を提示した上で考察を行いたい。一民俗事例の提示に終始することなく、将来的な公共人類学・民俗学に繋がる報告を行いたい。

２．十日戎開門神事での動向(保存会から講社の成立)

2004年の事件後、主だった参加者が神社に出向いて、神社側と話し合った。神社としては、「これまで通り門は参詣客のために開けるが、福男として認定しない（すなわち開門神事福男選びはしない）」という意見も出されていることが示された。これに対し、参加者側は強く反対。従来通り、神事を続けて欲しい旨の要望をした。特に参加者の一人であった平尾亮氏は大反対であった。彼は1997年より参加し、2度福男（二番福）に選ばれた。しかし、1999年に彼自身が交通事故に遭い、全速力で走ることができなくなったのである。長期の入院後、彼はギプスをつけながらも参加。その過程で彼は「最前列で走らなくても（福男になれなくても、参加者には）平等に福は訪れるのだ」と感じたのである。その気付きから、以降は主にこの神事の素晴らしさを伝えるという側面からも参加し続け、ホームページなどでその素晴らしさを発信していた。彼のこの神事にかける思いには、並々ならぬものがあった。まさに彼にとっては「神事がアイデンティティの一部」とも言え、それゆえの反対意見であった。

祭礼の調査者でしかなかった当報告者としても、1997年からの参与観察と、その中で築かれてきた人間関係によって、この神事が自らの生活にとっても大きな位置を占めるようになっていた。神社の社務所の談話スペースで、神社関係者に平尾氏と同じように反対意見を述べる中で、「涙が溢れ出た」のである。冷静さが必要とされるフィールドでの調査者としてはあるまじき行為かもしれないが、それを上回る感情が先行した。そこまで、当報告者においても無くなって欲しくない、大切な神事であった。

この神事の存続か否かの危機の中、存続を求める参

加者の多くが結束し、この開門神事の存続に自主的に動いてみようと考えたのである。結果として、参加者たちは「開門神事保存会」を結成し、平尾氏がその会長に就任した。さらに、参加者や調査者の思いが功を奏したのか、神社側は保存会に氏子青年会メンバーの紹介へと動いた。彼らとともに門前での秩序を保つために働きかけ、神事の存続を行うことを提案した。

神社としても「地縁」のほとんど存在しない参加者たちのみに関わらせるのではなく、神社との縁があり、年齢層も比較的近い「地域の若者」と協働させることでの問題解決を図ったともいえる。この過程で、開門神事保存会は氏子青年会の組織内に位置づけられた。運営側に加わった元参加者たちは「西宮神社」の名前の入った法被を着て行動することも可能となった。

写真①：西宮神社氏子青年会の法被を着てのくじ引き

協働の当初は、門前での順番決めを巡って、意見の違いがみられたが、話し合いの中でくじ引きの導入が決定し、2005 年 1 月 10 日に実際に開門神事が行われたのである。諸問題はその後も起こったが、この氏子青年会との協働によって、元参加者たちが運営サイドに加わっての開門神事が定着することとなった。氏子青年会は、十日戎の期間中、長年にわたって参道の整理・清掃を中心とした奉仕を行っており、開門神事についての知識が多分にあり、比較的早期に神事の大切さを理解をしていただけたことも大きい。当初は、30 秒に満たない開門神事にかける思いや存続に対しての理解や賛同も少なかったが、年月を経る中で、理解者も増えていった。逆に元参加者たちも、氏子青年会のアイデンティティともいえる「だんじり（地車）」の巡行に参加するなどし、急速に地域の中に入り込むことが出来たのである。

そのような動きの中、2008 年になって兵庫県警察が「参詣客保護」の観点から動き出した。全国的にも、雑踏対策において、行政側がイベントを主導する事例が増えていた。兵庫県下では、2001 年 7 月に明石市の花火大会で将棋倒しになり死者を出す事故があったため、雑踏対策の文脈から西宮神社へ対策の要請があったのである。具体的には、「より神事との関係が深い保存会を神社の監督下に置いて、開門も含めて催行するように」との要望であった。つまり、それまで神社側（神職関係者）が行ってきた門開けと、拝殿にたどり着いた参加者のうち三番目までを福男として認定することに加えて、開門前に並ばせる段取り決め、門を開けること、門が開いた後にいかに参詣客を誘導するのかという所にまで、神社が主体的に関わることが明確となった。

特にこれまでは露天商管理組合が行ってきた門開けに関しては、県警側から強く、神社側に移譲することが求められた。管理組合はこれまで、門の外で争いがあった場合などに関して私的な部分での仲裁を担い、開門までの混乱を抑える役割を果たし、一定の成果を挙げていた[4]。しかし、2008 年の兵庫県警からの指導は、このような私的な「統制」ではなく、神社側の正式な管理運営下で行われること、そしてその維持のためには県警が 100 人以上の体制で協力するというものである。これをイベントとして捉えるならば、当然の措置であると考えられる。しかし、例えば中里亮平が「祭礼によるもめごとの処理とルール―彼はなぜ殴られたのか―」[5]で挙げるように、本来は地域社会が私的に持っていたともいえる統制であるが、是非はともかくとして、「諸事情によって」、行政に取って代わられたことを意味するであろう。

このような流れは他地域の祭礼でも昨今見られる動きである。例えば「はだか祭り」とも称される、岡山市の西大寺会陽（えよう）においては、宝木（しんぎ）の争奪戦が行われ、見事獲得した者が西宮十日戎同様「福男」と呼ばれるが、2007 年に死亡事故が起きた後、行政との協議で警察による警備がより強化される一方、争奪戦の開始時刻も前倒し（午後 10 時）となるなど、様々な変更が行われていることが指摘されている。

これまでも、神社が雑踏の警備や開門後の警備員の配置に関しては主体となって行ってきたわけであるが、開門神事自体の一連の運営を神社が行うこと、その執行団体として保存会を神社の公認組織として認可し協働した上で、事故なく催行させることが決まった訳である。そのことによって、神社としても保存会があいまいな状態で神事に関わるのではなく、正式な神社の奉仕団体として行動してもらうことを求めだした。この保存会の中にも、参加者としての思いを断ち切れず、くじ引きには加わり、外れたと同時に保存会の活動に

シフトしようとするメンバーがいた。そういった、「マージナルなメンバー」が神事の専従スタッフとして活動するのか、参加者として走ることのみに集中するのかという択一を迫られることとなった[6]。

この動きの中で、必然的に 2004 年より関わりのあった氏子青年会以外の地元の人々とも意見交換をする機会が増えることとなった。つまり、より年齢層も幅広く多様な関わりを神社と持っている、地元自治会、露天商組合、神輿奉賛講社、吉兆福栄会の方々との「正式」な協議の場が持たれるようになったのである。

便宜的に氏子青年会に籍を置くだけでなく、神社の一組織として十日戎開門神事という一行事の催行という関わり方に留まらず、西宮神社のその他の祭礼などにも関わることに繋がった。

写真②：開門神事講社の設立（2008 年 12 月）

意見交換の中では、参加者の多くが地域の住民ではなく、さらに神事に参加していてもその神事の特性からほとんど接点がなかったこと、また、開門神事の前の順番待ちやくじ引きの際などにも近隣の住民への迷惑になっていたこともあり、初めのうちは、神社の働きかけがあったにもかかわらず、設立に関して否定的な意見も散見された。その中で、保存会の会長であった平尾氏らを筆頭に、参加者たちは地域住民たちに対し、神事の素晴らしさ、文化資源として保存していく意義を唱えた。その努力もあって、2008 年 12 月に各団体の協力の下で、正式に西宮神社の開門神事講社が成立することとなったのである。

平尾氏は講長に、その他開門神事の参加者で福男となった経験者や、保存会にて実績のあった人物が副講長や監事・理事などに就任した。調査者でありながら深く関与していた当報告者は理事に任命され、その後の神事の運営に引き続き関わることとなった。全体としての特に大きな変更点は、最大の見せ場となる「開門」にこの開門神事講社が直接関わるようになったことである。行政側からの強い要望[7]もあり、2009 年 1 月より正式に開門神事講社が門を開けることも決まった。

写真③：講社員による開門前の由来説明（2016 年）

これまでは一参加者にしか過ぎず、そのほとんどが参詣客とカテゴライズされる地元とはゆかりのない元福男をはじめとした団体が、まず神事の保存を訴え、それが神社をも巻き込んだ運動に発展した。2008 年 12 月以降は行政側の指導もあって、正式な講社として位置付けられるという、伝統的な祭事を起源に持つ祭事の中では、異質な発展を遂げた組織化であったと言えよう。2009 年 1 月以降は、くじ引き、開門に加え、その後の安全催行までをと、組織の受け持ち範囲も拡大した。講社として、また他の祭事にも参加する団体として、さまざまな参加者を内包しながら活動を行っている。

興味深いことは、積極的に地域の祭事に講社の各メンバーが協力し始めたことである。地域との縁が希薄であった福男が神社側の意向もあって、地域の祭礼にも参加をはじめ、地域との接点も生まれ始めた。

例えば、おこしや祭りは、古来よりこの祭り以降に浴衣を着ることになるという季節の変わり目の祭りであるが、この祭礼の行列に福男が新たに加わることとなった。一方、「西宮まつり」は秋の例大祭であり、阪神大震災以降規模が縮小していた祭事であったが、2000 年に船渡御を入れる形で復活したものである。大手前大学や夙川短期大学、神戸女学院大学、関西学院大学など、地域の大学の学生が協力しているところにも特徴がある祭りである。その祭りにも、2009 年より福男が加わることになった。神輿・時代行列に「福男」が加わり、船渡御にも参加する。その後の直会においては、祭礼奉仕した地域の人々の中で、福男が紹介される。過去には地域との繋がりが薄かった福男であったが、このような場を通じて、彼らがまさに地元のヒーローとして認識されることとなったのである。

写真④：「西宮まつり」直会での福男（右端）

3．学校と地域社会をつなぐ実践として

2015 年 1 月からは、この西宮神社十日戎開門神事福男選びの現場に、明石高専の学生と教員が関わることとなった。明石高専の学生が神事に携わるようになった経緯は、高専教員同士のつながりにあった。

昨年度まで北九州高専の教員であった当報告者は、毎年 5 月、監督同士のご縁もあり、2012 年より明石高専に顧問をしていた硬式野球部を連れて行って、遠征試合を行わせていただいていた。

写真⑤：明石高専教員・学生も参加して

2013 年に訪問の際には各教員の研究の話題となったが、その中で当報告者が長期にわたって西宮神社の開門神事の「実践的な、公共人類学的な」研究をしていることを知った監督の後藤太之氏と顧問の石丸和宏氏らは「是非、明石高専の野球部から福男を出そう」という発想に至ったのである [8]。結果、2014 年の福男選びに明石高専の野球部の学生が参加することになった。更に 2015 年の 1 月からは、くじ引きや開門前の整列の作業、すなわち開門神事講社の奉仕にも学生有志たちが関わることとなった。

彼らは、十日戎以外にも、西宮まつりなどにも積極的に参加した。この西宮まつりの特徴は、地縁を大切にしながらも、様々な人々が流入する街が氏子地域ということもあり、外国人が多数参加する点である。いわばローカルな祭りでありながら、国際的な「グローカル」な祭りである。そのことが、学生たちの興味を惹起したのか、多くの学生が参加することに繋がった。

写真⑥：西宮まつりにおける明石高専学生

同じ 2015 年には、関西の企業に就職した北九州高専の卒業生も開門神事講社の参加奉仕に加わった。2017 年 1 月には、現役の北九州高専生も参加するに至った。

写真⑦：当報告者と北九州高専学生（2017 年）

国立高専は全国に 51 校あり、現在は地域社会との連携が進められるようになった。地域社会としても常に若者がいる学校の存在は大きく、当神事のような、地縁がもともと少なかった祭礼やイベントにおいては、更なる連携が図られる可能性があると考える。

4．西宮神社における公共人類学・民俗学の可能性

前項においては、西宮神社の例大祭である「西宮まつり」には西宮市内にある大学を中心として、各地域の大学生が積極的に関わっていることに触れた。実はこの西宮まつりに関しては、2000 年に「再興」した当時から当報告者が深く関わっている。

1998 年から本格的に開門神事の調査を始めたが、そ

の中で、権宮司かつ西宮文化協会の会長でもあった吉井貞俊氏をはじめとした神職の方々と深く関わるようになった。1998年当時、西宮神社はまだまだ阪神大震災からの復興途上にあった。神社も甚大な被害を受けていたからである。大練塀の一部は崩壊し、絵馬堂など完全に崩壊した建物も多くあった。しかしそこには、他の阪神地域同様に「復興の見えざるパワー」が溢れていたのである。そのパワーをお持ちだった一人が、現禰宜の吉井良英氏であった。「福男」の研究に関しては、氏が当時、神社の広報担当だったこともあり、神社復興の一環という意味から当報告者と一緒に取り組んでくださったのである。そこから、社務日誌の閲覧や新聞調査などでのアドバイスを与えてくださったことで、自らの研究が出来たと言っても過言ではない。

当時は、現在ほど大学との付き合いも少なかった西宮神社だったが、1998年に転機が訪れた。当報告者の指導教員であった森田三郎氏の指導教授にあたる、祭礼研究者であった米山俊直氏が、大手前女子大学（現大手前大学）の学長に就任。大学が西宮市あり、着任後すぐに米山氏が西宮神社と一緒になって「えびす信仰研究会」を立ち上げたのである。祭礼研究をやり始めていた当報告者は、幸いにもその中に加えていただけた。米山氏は、研究の一環として、自身のゼミの学生にも各祭礼の映像の記録や各祭礼への積極的な参加を促していたのである。ここで、大学関係のつながりが以前よりも強固になっていった。

2000年には震災復興を祝す形で400年間途絶えていた「海上船渡御」が、既存のお神輿巡行である「陸渡御」に加わる形で復活。この船渡御に大手前大学も加わっていくことになった。2001年からは、当報告者にも依頼が来ることとなった。それは、お神輿の担ぎ手として、大学生を参加させてくれないかという内容であった。氏子青年会は存在するが、この西宮まつりが開かれる9月23日は以前からの西宮神社の例大祭であり、お神輿の巡行はあったものの、それを担ぐのは氏子青年会から抜けた年配の方々で、主力となり得る若年層は、彼らの本分である「だんじり巡行」で多くが充てられており、祭礼自体が巨大化したこともあって、慢性的な人材不足であった。

当時、甲南大学の大学院生であった当報告者は、2000年8月から1カ月、「大学洋上セミナーひょうご2000」の学生（大学院生）リーダーを務めた関係で、兵庫県内の多数の大学生と知り合うことが出来た。彼らに声を掛け、結果としてはこの年に10名ほどが参加することとなった。このような地縁としては薄いものの、大きな意味で兵庫県内の大学生が参加し、地縁だけではまかなえない人員を確保し、祭礼が実施できたことは、神社にとっても大きな気づきであったに違いない。当報告者の協力は3年くらい続き、その後は主に西宮地域にある大学に神社が声をかけて、祭礼の参加者が増えていった。特に現在では、神戸女学院大学の学生の参加が目覚しい。彼女たちは神輿は担げないものの、特別に誂えた女性用の神輿を担ぎ、祭礼を盛り上げるのに一役買っている。

写真⑧：留学生も交えて女性用神輿を担ぐ学生

このように、地縁として、日本においては関連性が薄いといえる教育セクターであるが、大学は18歳以上の学生が流動的であるものの、常に存在する稀有な組織である。これは、地域社会にとっては大きな「若い力」となる。

教育機関としても、これまでは、教育上の宗教的中立性に基づき、宗教行事として認識された祭礼に関わる教育機関が少なかったが、文化資源に直接触れる場としてのサービスラーニングとして、課外のカリキュラムに導入する動きも考えられるのではないか。西宮神社の氏子区域は、20世紀から外国人の流入が他地域よりも多く、「阪神間モダニズム」が花開いた地域である。前述のとおり、この西宮まつりにも多くの外国人が参加する。在日の外国人にとっても、日本文化を容易に味わえるこの祭礼の存在は大きい。大学や各学校のキャンパス内では経験出来ない社会人との交流や、外国人の交流、さらに社会に触れる機会は学生たちにとっても刺激的なものとなり、祭礼に関わる地域住民にとって、または様々な人々を受け入れてきた西宮神社にとっても望ましい好影響が訪れると考える。

このように、地理的に大学や学校が多く、外国人も多数居住する阪神間に立地する西宮神社は、公共人類学・民俗学の実践を行う場としては最適だと考える。次回以降の研究報告では、諸大学と外国人が当神社にいかに関わるようになっていったのかを、当事者のイ

ンタビューからさらに深く論述していきたい。

５．結語・更なる実践の可能性と課題

2017 年 4 月、当報告者は、北九州高専より明石高専に転任することとなった。9 年いた北九州でも祭礼研究を新たに始めていたが、当報告者にとっての「フィールド」は、やはり 20 年以上関わっている兵庫県の西宮神社である。一昨年度には、福男研究の集大成として、博士論文の形にまとめた。しかし、3.で述べたように、高専の学生たちが競争に参加するだけでなく、開門神事の「門を開ける」奉仕を始めるようになった。地理的に近い明石高専の学生たちだけでなく、北九州高専の学生までもが 2017 年には参加した。メディアによって全国で知られる祭礼となり、事情をよく知る教員の学生だからこそやってきたのだろうが、高専生が民俗に触れる機会はそうあまりない。来たる 2018 年 1 月にも参加したいと話していた。さらに、北九州高専の学術協定校である韓国・全北大学校の卒業生も、写真雑誌の取材を行い、韓国内で報道をした。実際に当報告者が広報の媒介を教育セクターを介して、公共人類学的に行っているとも言えよう

写真⑨：2017 年 9 月 23 日の西宮まつりでの学生

そのような地理的な広がりも期待できるが、何より当報告者自身が、西宮神社の近所、生まれ育った地でもある関西圏に身を置くことが出来るようになったことは大きい。既に顧問をする野球部では、野球部員のみならず教員まで走ろうとする動きがある。先述の通り数年前より、西宮まつりにも明石高専の学生が参加してくれている。今年度もその流れで、2017 年 9 月 23 日には平安装束を身にまとい、学生が時代行列に参加[9]してくれた。

これまでの 20 年以上で得た調査対象者は、もちろん対象者ではあるが、当報告者の仲間である。元参加者、地域住民、そして調査者のみではなく、そこに正式に教育機関を加えて、公共人類学・民俗学の実践が出来る、またとない機会が得られたわけである。

地の利を生かした継続的かつ実践的な研究をすることによって、見えてくるであろう諸問題を次回以降の論考で深めていきたい。現在、学界においては「公共人類学・公共民俗学」という言説自体が未だ成立途上である。今回の論考では、諸言説の紹介や変遷についての言及を控えた。次回の論考ではその紹介にも努め、西宮神社における諸祭礼での取り組みはその中でどのように位置づけられるのを言及していきたい。

参考文献・注

1) 西宮神社編『西宮神社の歴史』1985、学生社

2) 荒川裕紀「十日戎開門神事の歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 43 号、2010、p.105-114

3) 荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究」2015、大阪大学（博士論文）

4) たとえば、2005 年にはじめて参加者と氏子青年会が初めて関わることとなった、開門神事での門前での参加者の出走位置をくじ引きにて定め、出走前まで「静粛に」待機させる際、参加者の一部とくじに漏れた人々が騒ぐ事態が発生していた。その際に静寂を取り戻せたのは、彼らの力によるところが大きかった。

5) 中里亮平「祭礼によるもめごとの処理とルール―彼はなぜ殴られたのか―」『現代民俗学研究』2、2010、p.41-56

6) ちなみに 2017 年現在でも、この「マージナルなメンバー」は存在している。講社としては、くじ引きを引きたいメンバーは、くじ引きで外れた場合にのみ手伝い（開門、誘導など）が出来るという形を採っている。くじ引きをしたい多くが、足に自信がある元福男であることが多く、彼らは危険度が高い開門の仕事に就くことが多い。福男が開門するという福男選びのオーセンティシティの上でも、彼らの存在は必要不可欠である。

7) この「強い要望」の意味としては、開門神事講社が神事に関する一切を行うことによって、行政と神社からの明確な意思が、着実にそして均一に伝わることを意図したものであるとも言えよう。

8) 当発表者が調べた限りにおいては、三番福までの福男は、明石高専からは 1 名である。1996 年に三番福を獲得している。

9) これまでは学生の祭礼奉仕は、お神輿での奉仕が多かった。今年度に関しては、外国人の参加者も含め、神輿奉仕の希望者が多かったこともあり、高専の学生は時代行列に加わることとなった。海上船渡御は、神輿奉仕者と時代行列奉仕者とは別の船になり、期待されていた「船上での国際交流」の機会とはならなかった。しかし、高専学生と福男が同じ船に乗り合わせることとなり、学生たちにとっては貴重な体験になった様である。